



第15回 IIBC 高校生英語エッセイコンテスト

テーマ

身近な異文化体験

～コミュニケーションを通じた響きあい～

本コンテストの狙い

グローバル化が急速に進展する現在、将来グローバルに活躍するであろう高校生の皆さんに、異なる文化を持つ人々と関わり合う大切さを見つめ、考える機会や、自分が考えたことを英語でしっかりと表現する能力を養う場を提供すること、を狙いとしています。

身近な異文化体験とは

例えば、自分とは異なる価値観を持つ相手は「異文化」と考えることができますので、海外での体験に限りません。

受動にとどまらず、能動的な関わり合いを表現すること

体験した異文化の紹介にとどまることなく、それらの体験、相手との関わり合いを通じて、自身がどのように変わったのか（影響を受けたのか）、相手がどのように変わったのか（影響を与えたのか）を英語で表現してください。

主催

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)

後援

文部科学省、米国大使館

協賛

一般社団法人 日米協会

特別インタビュー

- 渋谷教育学園幕張中学校・高等学校 山下 実穂 さん
- 報徳学園高等学校 横田 卓己 さん
- アルumni特別賞受賞者とアルumni特別賞審査員
学校法人角川ドワンゴ学園 S高等学校 住井 円香 さん(受賞者)、燕昇司 健吾 さん(審査員)、手塚 まりこ さん(審査員)
- 審査員(異文化経営学会会長) 馬越 恵美子 様

応募規定

応募資格

日本の国公立高等学校、高等専門学校(1～3年)および中等教育学校(4～6年)に在学し、英語が母語でない生徒お一人様、1作品とします。学校単位での応募となります。

応募部門

本選部門 (以下「本選」)

- ・審査の対象となります。・1校あたり2作品まで応募可能です。
- ・校内選考の実施は各学校のご判断にお任せします。

奨励賞部門 (以下「奨励賞」)

- ・1校あたり20作品(20名)以上に応募可能となります。本選への応募は、この数には含まれないものとします。

使用言語

英語

応募要件

501語以上700語未満

- ・タイトル・カンマ・ピリオドは語数に入れません。
- ・エッセイ内で他者作成の文章の引用が必要な場合は、引用箇所印をつけ、必ず引用元を記載してください。引用元についての記載は、規定の語数には含まれません。

注意:以下のいずれかに該当する作品の応募は認めません。

- ・自作未発表でないもの。・翻訳ソフトを使用したもの。
- ・AIチャットサービス(例: Chat GPTなど)を使用したもの。・語数オーバー、語数不足のもの。

応募期間

2023年6月1日(木)～9月6日(水) 17時まで

応募方法

ご応募は、IIBC高校生英語エッセイコンテスト公式サイトのお申し込みフォームより受け付けます。

ご応募はこちら:<https://iibc.me/essay>

Wordデータでご応募ください。手書きのものは受け付けません。



- ・インターネットのシステム障害やメールアドレスの誤りにより、個人情報および応募作品を紛失された場合の責任は負いかねますのでご了承ください。
- ・本選・奨励賞ともフィードバックをつけたエッセイは、11月中旬以降にご応募いただいた先生のメールアドレス宛にお送りします。
- ・ご応募いただいた先生、生徒様への参加賞の贈呈はございません。ご了承ください。

本 選

- ・エッセイの形式は公式サイト上の書式見本に従ってください。
- ・公式サイト上の【本選応募用】応募フォームに必要事項を入力し、エッセイ作品(Wordファイル)を添付して送信してください。
- ・1校あたり2作品までご応募いただけます。2作品のご応募の場合、1つの応募フォームで手続きを行ってください。

奨励賞

- ・エッセイの形式は公式サイト上の書式見本に従ってください。
- ・全てのエッセイ作品(Wordファイル)のファイル名に連番をつけてください。例)IIBC-01.doc、IIBC-02.doc
- ・連番をつけた全てのWordファイルを圧縮して1つのファイルを作成してください。
ファイルの圧縮形式はZIP形式またはLHA形式としてください。
圧縮したファイルの容量が10MB以上になる場合は、IIBC高校生英語エッセイコンテスト事務局までお問い合わせください。
- ・公式サイト上の【奨励賞応募用】応募フォームに必要事項を入力し、圧縮したファイルを添付し、送信してください。
- ・応募フォームへ入力した「参加人数」と、送付するエッセイの数が同数であることを必ず確認の上、圧縮、送信してください。

問い合わせ先

(一財)国際ビジネスコミュニケーション協会 IIBC高校生英語エッセイコンテスト事務局
E-Mail: iibc-contests@iibc-global.org

本コンテストに関わる情報は、随時公式サイト(<https://iibc.me/essay>)にてお知らせします。



著作権

主催者に帰属します。

審査(本選作品対象)

審査方法

内容・構成・表現力・文法/語彙などを総合的に評価します。
審査時には、学校名・生徒氏名は除き、エッセイ本文のみを採点します。

一次審査

IIBC高校生英語エッセイコンテスト事務局がエッセイを評価します。

最終審査

下記審査員が一次審査を通過したエッセイを評価します。

最終審査 審査員 (順不同)



東京国際大学教授
立教大学名誉教授
NHKラジオ「基礎英語」シリーズ全体監修者
松本 茂 先生



異文化経営学会会長
馬越 恵美子 様



ジャパン・インターカルチュラル・
コンサルティング 社長
ロッシェル・カップ 様



公益財団法人 東洋文庫
専務理事
ハーバード大学アジアセンター
国際諮問委員
杉浦 康之 様



一般財団法人
国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)
理事長
大橋 圭造 (審査員長)

日米協会会長賞審査員

日米協会より国際理解や国際交流の観点で優れた作品を選定します。



一般社団法人 日米協会
会長
藤崎 一郎 様



一般社団法人 日米協会
専務理事
岡本 和夫 様

審査結果

2023年10月中旬以降、公式サイトにて入賞者および入賞作品を発表します。
発表前に、ご応募いただいた先生のメールアドレス宛に入賞者を通知します。
また後日、先生のメールアドレス宛に表彰式の日程をお知らせします。
受賞者ご本人並びに指導教員を(合計3名まで)表彰式へご招待いたします。

表彰

本 選:最優秀賞(1名)/優秀賞(1名)/優良賞(1名)/特別賞(5名)/日米協会会長賞(3名)^{※1}/アルムナイ特別賞(1名)^{※2}
奨励賞:1校20名(20作品)以上の応募をされたすべての学校と担当された先生に贈られる賞

すべての応募作品にネイティブスピーカーによるコメントをつけてフィードバックします(応募要件を満たしていないものは除きます)。本選受賞者の皆さん、奨励賞受賞校にオープンバッジ(デジタル証明書)を贈呈します。

※1 一般社団法人日米協会(会長:藤崎 一郎氏)が、国際理解や国際交流の観点で優れた作品を選定
※2 過去の受賞者(アルムナイ)が審査員となり、独自の観点で優れた作品を選定



オープンバッジ

副賞

最優秀賞を受賞された方には、国内研修プログラムまたは同等額のノートPCを贈呈します。

個人情報の取扱いについて

ご提出いただいたエッセイおよびご担当者様の個人情報は、コンテストの運営、入賞者への通知、表彰状・賞品送付等に利用します。また、次年度のIIBC高校生英語エッセイコンテストに関連するご案内、IIBCが主催・協賛・後援するイベントおよびTOEIC Program各種テスト関連のご案内、前述の目的達成のための電話・メール・FAX・郵便による連絡に利用いたします。表彰式当日はご参加いただいた方々のお写真を撮影させていただきます。入賞作品(学校名・生徒氏名)や表彰式参加者のお写真は公式サイト内での発表、当方資料ならびに報道発表資料としても利用させていただくことがあります。お預かりした個人情報は、上記利用目的のために契約を締結した委託先に預託します。

インターネットのシステム障害やメールアドレスの誤り、郵便事故などにより、個人情報および応募作品を紛失された場合の責任は負いかねますのでご了承ください。個人情報の利用目的の通知、開示、訂正、追加、削除、利用の停止、消去等を希望される場合は、IIBC高校生英語エッセイコンテスト事務局(iibc-contests@iibc-global.org)までお問い合わせください。

上記の個人情報の取扱いに同意の上、ご応募くださいますようお願いいたします。 個人情報保護管理者: (一財)国際ビジネスコミュニケーション協会 常務理事

「書いたものが認められたことで、ライティングに自信ができました」 第14回(2022年)最優秀賞・日米協会会長賞を同時受賞した山下さんにお話をうかがいました。



第14回(2022年)
最優秀賞・日米協会会長賞 受賞
渋谷教育学園幕張中学校・高等学校(千葉県)
山下 実穂 さん

— エッセイに書くテーマはどのように決めましたか？

小学生の頃、親の仕事の関係でイギリスにいたのですが、その地域には敬虔なカトリック教徒が多く住んでいました。日本にいた頃は宗教のことはまったく考えたことがなかったのですが、イギリスに引っ越してからカトリックの人々と触れ合ったことで、神についても考えるようになりました。いろいろなギャップや問題もありましたが、カトリック教徒の親友ができたことで、宗教観は違っていても理解しあって仲良くすることができるんだ、ということもわかりました。今回のエッセイの課題が「身近な異文化体験～コミュニケーションを通じた響きあい～」と知って、真っ先に浮かんだのがこのイギリスでの体験でした。

— どのようなプロセスで書き進めましたか？書くうえで大変だったことは？

まずは文法が間違っていないから、初稿を一気に書きました。その後、構成を考えました。導入部はインパクトがある文章にしたかったので、自分が納得できるまでかなりの時間を費やして書き直しました。その結果、礼拝のシーンから始めることにしました。大変だったのは、エッセイの着地点をどうするか、ということです。「寛容の精神が大事である」という大きな結論は書き始める前から決めていたものの、いざエッセイを書いてみると、いろいろな考えが出てきて何を書きたいのかわからなくなってきてしまったので、一度、原点に戻って考え直しました。

— 本コンテストに応募した動機と、受賞を知ったときのお気持ちを教えてください。

中学以降は日本に住んでいるのですが、小学生の頃の海外生活で身

につけた英語力を更に高めるために英語学習には力をいれていました。もともと英語で文章を書くことが好きなのですが、これまで人に読んでもらう機会がなかったので、自分の英語が人に伝わるのかどうか自信がありませんでした。それで、学校に掲示されていたコンテストのポスターを見て、挑戦してみようと思ったのです。ライティングのコンテストに応募するのは初めてだったので、先生から受賞したと結果を聞いたときは驚きました。先生もほめてくれましたし、両親も私がコンテストに向けて努力している姿を見て喜んでくれていたので、受賞できてよかったです。何より、自分のエッセイに込めた思いと英語の文章が人に伝わったことは、自信にもつながりました。

— 表彰式に参加されて、いかがでしたか？

事前に他の受賞者のエッセイを読んでいたのですが、「この人があのエッセイを書いたんだ!」と感動しました。親睦会の時間も楽しくて、互いの学校生活や将来の目標を話したりしていました。素晴らしい同世代の方々と知り合えたことも、コンテストに応募してよかったことのひとつです。

— 日頃の英語学習では、どのようなことをされていますか？

高校の授業では、エッセイライティングを含めた高度な英語を学んでいます。個人的にはインプットを大切にしている、幅広いジャンルのニュースや記事を読むようにしています。読書も好きですが、同じ作家の本に偏ってしまうと、その人の文体に似てきてしまうので、いろいろなものを読むようにしています。学校の図書館に洋書の蔵書がたくさんあるので、先生のおすすめの本を聞いて、それを読むこともあります。

— 将来の夢や目標を教えてください。

将来の夢は定まっていませんが、海外で大学生活を送ってみたいので、アメリカの大学に進学するための準備をしています。

— アメリカを希望する理由は？

アメリカは多様性のある国だと思うので、そこで多くの人と知り合ったり学んだりすることで、視野を広げていきたいです。

— これから本コンテストに挑戦する高校生に向けて、アドバイスをお願いします。

過去の受賞作の分析など頭を使う作業も必要ですが、心から楽しむことが大事です。私自身は、書くことを楽しいと感じる気持ちやパッションがなければ、最後まで書き終えることができなかったと思います。また、コンテストに応募したことでライティング能力を高めることができましたし、テーマについて深く考えることもできました。「異文化体験」というテーマを通じて、自分のこれまでの人生についてあらためて考えるきっかけにもなりました。エッセイを書くことで得るのはたくさんあるので、ぜひ挑戦していただきたいと思います。



「英語ができれば、もっと人生が楽しくなりそうです」 第14回(2022年)で特別賞を受賞した横田さんにお話をうかがいました。



— 今回の応募動機を教えてください。

母に勧められたのがきっかけです。その際は、怪我をしており所属していたサッカー部で練習ができない時期でしたので、挑戦してみようと思いました。

— 勧められてすぐに挑戦しようと思いましたか？

正直なところ英語は苦手でしたし、最初は「書くことがないなあ」と躊躇していましたが、中学生の頃にドイツに行ったことがあったので、そのときの体験なら書けるかもしれないと思いました。あとは、中学のときに日本語での読書感想文の賞をいただいたことがあったのですが、高校では何も受賞したことがなかったので、コンテストに挑戦してみようかな、と思いました。

— ドイツでのどのような体験を書こうと思われたのか、詳しく教えてください。

中学2年生の夏休みに1ヵ月ほどサッカーでドイツに遠征したのですが、そこでは対戦相手のチームにいろいろな国籍の人がいて、いろいろな国の言葉が飛び交っていました。いいプレーをすれば褒めたた一方で、ひどいプレーをすると罵倒まではいかないものの厳しく指摘されました。そして、そのような中で、僕は中国人と間違われることがありました。でもよく考えたら、僕も現地の白人の人々を見て、スウェーデンの人なのかドイツの人なのか、どこの国の人かわからないんです。そのような体験が新鮮で、国籍などにとらわれずに、広い視野を持ちたいと感じたので、そのことを書きました。

— これまで英語でエッセイを書いた経験はありましたか？またエッセイを書いたプロセスと大変だったことを教えてください。

英語でエッセイを書くのは初めてでしたが、まず自分で書いてみて、書き終わってから先生に添削していただきました。サッカーの練習に行く前と練習後に少しずつ書いて1週間くらいかかりました。大変だったことは、文法に気を付けながら、言いたいことが伝わるように書くことでした。

— 英語は苦手とのことでしたが、ドイツに行く前は英語の予習はしましたか？

英語での挨拶くらいは練習してから出発しましたが、現地ではドイツ語を話せる日本人の方がサポートしてくれたので困ったことはありませんでした。日本人も僕ひとりではなくて何人も一緒だったので、練習中も宿泊施設で過ごすときも日本語で話していました。ただ、街に出たときに英語で道を尋ねたら、全く伝わらなかったんです。さらに、現地の人に「何をしているの?」と聞かれて「Soccer」と英語で答えましたが、これも伝わりませんでした。ドイツではイギリス英語が主流だから「Soccer」ではなく「Football」と言うんだ、ということを知りました。

— 今回のコンテストを通じて、英語は好きになりましたか？

特別賞を受賞したことで英語に興味を持てるようになりました。今では毎日、英語の勉強をしています。聞く力と話す力が足りないと思うので、YouTubeの動画を見ながらシャドウイングの練習を毎日1時間くらいしています。海外で活躍しているサッカー選手のインタビュー動画もよく見ます。

— 特別賞を受賞したと聞いたときの感想は？

部活がオフで映画を見に出かけていたときに、突然、先生から「吉報です」と電話をいただいて、めっちゃびっくりして嬉しかったです。僕よりも、母の方が喜んでいただかかもしれません。

— 表彰式に参加されて、いかがでしたか？

受賞の一言スピーチは、みなさんしっかり話していましたが、僕は一言しか考えていなかったの、本当に一言で終わってしまったのが恥ずかしかったです。また同じテーブルの人と話せて楽しかったです。

— 今後チャレンジしたいことや将来の夢があれば教えてください。

アメリカに留学した先輩の話を聞いていたらとても楽しそうなので、海外留学もしてみたいです。そのために英語の勉強をしています。英語を話せばさまざまな国の人と親しくなれるので、もっと人生が楽しくなりそうだと思います。将来の夢はまだはっきりとは決まっていませんが、サッカーに関わる仕事してみたいです。海外のサッカーチームの分析官にも興味があるので、やはり英語力は必要だと思います。

第14回(2022年)のアルムナイ特別賞受賞者とアルムナイ特別賞審査員を務めた大学生2名による対談をお届けします。

本コンテストの過去の受賞者(アルムナイ)が審査員として、1作品を選定する「アルムナイ特別賞」。第14回(2022年)で同賞を受賞した住井さんとアルムナイ特別賞審査員を務めた大学生の燕昇司さんと手塚さんが一堂に会し、受賞した気持ちや審査員としての感想などを語り合いました。



第14回(2022年)アルムナイ特別賞・
優良賞・日米協会会長賞を同時受賞
学校法人角川ドワンゴ学園 S高等学校(茨城県)

住井 円香 さん(中央)

アルムナイ特別賞審査員
第9回(2017年) 特別賞受賞

燕昇司 健吾 さん(右)

アルムナイ特別賞審査員
第12回(2020年)アルムナイ特別賞受賞
手塚 まりこ さん(左)

——住井さんにお伺いしますが、今回のエッセイではどのようなトピックを選びましたか？

住井: コンテストのテーマにある「身近な異文化体験」ということで思いついたのが、昨年亡くなった祖父のことです。祖父は遠方に住んでいたのですが、私たち家族が祖父のところへ行こうとすると「来なくていいよ」と言われたことがあり、突き放されているように感じていました。でも、それは祖父の本心ではなくて、父の転勤でアメリカに住んでいた私たち一家の忙しさを気遣ってそう言っていたのだということがわかったのです。私の世代は直接的に言われないとわからない傾向があるように思いますが、祖父の世代は気遣いから遠回しにものを言うので、それが私には異文化のように感じられました。ジェネレーションギャップともいえますが。

——審査員の燕昇司さんと手塚さんには、今回、審査基準を考えるとところから始めていただきましたが、難しい作業でしたか？

燕昇司: もう1人の審査員を含めた3人で審査基準を考えましたが、それぞれ違った価値観を持った人たちが3つの審査基準に絞るのが大変でした。それこそまさに異文化でした。思っていることを言語化する難しさも実感しました。結果、ユニーク性、メッセージ性、表現力の3点を審査基準にしました。

——改めて、住井さんのエッセイを特別賞に選んだ理由をお聞かせください。

燕昇司: 多くの作品が文法も単語も完璧なのですが、その中で人の心を動かす表現力があるかどうかを重視しました。住井さんのエッセイは難しい言葉は使われていないのですが、言葉の選び方や構成が

良いと思いました。ユニークさにおいては、海外での体験ではなく、日本国内にいる家族の話を選んだ点が、他の作品にはない視点でした。

手塚: 住井さんのエッセイは、表現力に優れていると思いました。単語の使い方が上手で、流れるように読めました。また、家族という身近なテーマを取り上げていて、多くの人が共感できる内容だったので、メッセージ性においても素晴らしいと思いました。



受賞者 住井 さん

エッセイを書くことで自分自身への理解を深めることができました

——審査員の講評を聞いて、いかがですか？

住井: とても嬉しいです! 胸が温くなりました。私は中学3年生から高校2年生までアメリカに住んでいたのですが、最初はそのときの体験について書こうかとも考えましたが、自分にとって影響が大きかったのは海外での体験よりも祖父のことだったので、そこを深掘りすることにしました。その点を審査員に評価していただけたことに喜びでいっぱいです。



人の心を動かす表現力があるかどうかを重視しました

アルムナイ特別賞審査員
燕昇司 さん

—— 燕昇司さんと手塚さんにお聞きしたいのですが、今回、アルムナイ特別賞審査員を引き受けようと思った理由は？

燕昇司：私は5年前に特別賞を受賞しましたが、おかげさまで今では英語力を生かして多くの経験を積めるようになりました。今回、審査員を務めた理由は、多くの高校生のエッセイを読みたいと思ったことです。読むことで自分自身の視野が広がりますし、励みにもなります。IIBCに恩返しをしたい気持ちもあります。

手塚：2年前にアルムナイ特別賞を受賞しましたが、この賞は過去の受賞者の現役大学生が審査員ということで、身近な存在の方々を選んでくださったことが嬉しく、自信にもつながりました。それまで賞というものをいただいたことがなかったので、なおさら嬉しかったことも覚えています。その体験から、私も高校生の背中を押してあげたいと思いました。

—— ご自身がエッセイコンテストに参加されたことで、これまでの生活で何かポジティブな変化はありましたか？

手塚：大学では英語で授業を受ける学部に在籍しているので、エッセイを書く機会も多くあります。その際に、コンテストに参加して学んだことが役立っています。また、現在は日米協会の学生インターンとして事務局でお手伝いをしています。

燕昇司：エッセイで自分の体験を書く練習をしたことで、自己開示の能力が身についたことが一番のメリットです。自己開示をすることは、話す場面でも役立ちます。社会に出るといろいろな人と知り合いますが、自分の経験を相手に話すことでその人との距離が近くなるので、コミュニケーションが円滑になります。

—— 実際に審査員を務めた感想は？

燕昇司：勉強になりました。今の高校生はこういう風に表現するんだ、といったこともわかり、学ばることが多かったです。

手塚：エッセイを通じて高校生の方々が身近な問題に気付いており、感心しました。

—— 住井さんは、今回、エッセイコンテストに参加したことで何か得られましたか？ また、表彰式に参加されていたいかがでしたか？

住井：自分の話を書いても読む人にとっては面白くないんじゃないか、と思うことも多々あったので、受賞できたことで、エッセイを書くことに自信を持てるようになりました。表彰式では、英語力も高くて優れた同年代の人々と知り合えて嬉しかったですし、とても刺激になりました。

—— 本コンテストに参加を検討している高校生に、メッセージやアドバイスをお願いします。

燕昇司：異文化体験はいろいろなところに転がっているので、それに気付く感受性を養うとよいのではないのでしょうか。また、受賞するしないに関わらず、英語でエッセイを書いてみてほしいです。何事にも能動的になることが大事だと思います。

住井：高校生のうちに自分の経験について深く考える機会は少ないと思いますが、エッセイを書くことで自分自身への理解を深めることができ、視野も広がると思います。ぜひ積極的に参加をしていただきたいです。

手塚：何を書いていいのかわからないまま進めると、うまくいかないことが多いと思います。まずは思いついたことをメモして、その中から本当に書きたいことをピックアップするとよいのではないのでしょうか。エッセイを書くことは自分自身の体験を振り返る作業につながるので、チャレンジして損はないと思います。



私も高校生の背中を押してあげたいと思いました

アルムナイ特別賞審査員
手塚 さん

—— みなさんの夢や目標を教えてください。

住井：今は受験の結果待ちなのですが、経済格差の是正などに興味があるので、アメリカの大学で経済学を学びたいです。

燕昇司：英語のほかにドイツ語の勉強もしていますが、他の言語にもチャレンジしたいです。また、まもなく社会人になりますが、語学力を生かし、世界で働ける人材になりたいと思っています。

手塚：今年の秋からイギリスの大学に留学することになりました。そこでは戦争や紛争などについて学ぶ予定です。将来は外交官も視野に入れているので、これから英語も含めて多くの勉強を頑張ろうと思っています。



「自分の中から湧き上がるものを相手に伝えるように書くことが大事です」 第1回より審査員を務める異文化経営学会会長の馬越恵美子様にお話をうかがいました。



異文化経営学会会長

馬越 恵美子 様

——本コンテストの印象を教えてください。

これまで少しずつテーマが変更されてきましたが、「異文化」というキーになるテーマを変えずに続けていることが素晴らしいですね。受賞者だけでなく参加した生徒の多くがこれを機に成長して社会に出ていきますので、社会貢献のひとつにもなっているのではないかな、と思います。また、エッセイを書くということは、地味な作業です。スピーチの場合は話し方や身振り手振りなども含めて表現することができますが、ライティングの場合はそうはいきません。ただそこに書いてある内容だけで勝負する。書き手の体験に基づいたオリジナリティのあるストーリーなのか、そこに書き手の意見があるのか、そういったことが問われるので、ごまかしがききません。厳しいからこそ、エッセイコンテストには大きな価値があると思います。

——審査をする際に大切にしているポイントを教えてください。

私の場合は、細かい文法はチェックせずに一気に読んで、「面白かった」と思ったものが良いエッセイです。文法に関しては、大きく間違えていたら読んでいるときにそこで引っかかってしまいます。つまり、最初から最後まで一気に違和感なく読めるということは、文法にさほど問題がないのだと思います。構成でいうと、最初の一行目はとても大事ですね。引き込まれる文章かどうか。そして、オチがわからずに読みすすめられるかどうか。「どこかで読んだことあるな」と思わせない独自の内容であることも大事です。さらに、エッセイで書き手が自分の人生を表現豊かに語っているかどうか、も重視しています。

——第1回から審査をされてきて、高校生のエッセイの内容に変化はありましたか？

内容の幅が広く深くなってきたように思います。例えば、これまで宗教の話が出てくるエッセイはなかったように記憶していますが、最近

ではキリスト教やイスラム教について触れている作品がいくつか見られました。話題の幅が広がったことに関しては中学生や高校生の海外留学が増えたことなどもあるかと思いますが、渡航経験のあるなしに関わらず、現在はインターネットで多くの情報を入手できるので、トピックの内容について深く掘り下げて考えられるようになったのではないのでしょうか。

——高校生が英語でエッセイを書くことの意義を教えてください。

高校生の時期というのは感性がマックスになっているので、さまざまな事柄が鮮烈に印象に残ります。その時期にしか得られない体験や考え、気持ちを文章に書いて伝えるということはとても意味のあることではないでしょうか。エッセイコンテストでいえば、テーマに合うトピックを探すことから始めますが、ユニークなトピックを見つけるには日常的にアンテナを張り巡らせて感性を鋭くして情報をキャッチしなければなりません。いろいろなことに好奇心を持ち、わからないことがあれば聞いてみる、といった習慣を身につけることに役立ちます。もうひとつ、エッセイを書くということは、日記とは違うので、独りよがりの文章になってはいけません。自分の中から湧き上がることを相手に伝えるように書く、というトレーニングになります。「相手に伝えるように」というのはコミュニケーションの核となるものですから、エッセイを書くということは話す能力を伸ばすことにも役立ちます。

——高校生のうちに英語力を身につけることは、なぜ重要だと思われますか？

高校生の間に英語に対する苦手意識を持たず普通に会話ができるレベルの英語力を身につけることが大切だと思います。最近ではパソコンやスマホを使えないと不便なのと同じで、英語ができないと不便になりました。英語はパソコンやスマホと同じ、ひとつのツールなんです。そして何よりも、英語を勉強するということは異文化を知ることなので、視野を広げることにつながります。何か伝えたいと思った時に日本語しかできなければ日本の人しか発信できませんが、英語ができれば世界中の人に発信ができます。世界が広がりますし、より人生を楽しめるようになると思います。

——本コンテストに参加する高校生にメッセージをお願いします。

自分の可能性を信じて、自信を持って人生を歩んでほしいです。エッセイコンテストへの参加が、その助けになるのではないのでしょうか。また、私自身は人生において人との縁がとても大事だと思っているので、本コンテストに参加することで生まれた先生との縁や、受賞者であれば表彰式に参加して出会った同年代の人々との縁などを、これからの人生に生かして、良い縁をつないでいていただきたいですね。

(取材日: 2023年1月)